

平成26年度第4回調布市男女共同参画推進センター運営委員会
議事録（要旨）

1 日時

平成27年1月27日（木）午後6時30分～8時30分

2 場所

市民プラザあくろす研修室3

3 出席者（五十音順，敬称略）16人

市古委員，岩井委員，宇治委員，熊崎委員，小宮委員，小森委員，角委員，
高橋委員，田村委員，二宮委員，内藤委員

オブザーバー

朝日センター長（市民活動支援センター），

田口香子（株式会社地域計画連合）

横尾主査（総合防災安全課 防災係）

童亜斐（首都大学東京 都市環境学部 建築都市コース 都市防災研究室）

宮武沙良（首都大学東京 都市環境学部 建築都市コース 都市防災研究室）

事務局 内田，塚原，高橋

4 内容

(1) 開会

(2) ワークショップ

今回は調布市で首都直下地震時に想定される「世帯像」ごとの生活再建過程と抱える課題について検討し，センターがフォローすべき支援ニーズと役割について頭出しをしました。

今回は避難生活期と生活再開移行期に絞って，支援ニーズと果たせる役割について議論します。

ア 全体ガイダンス

前回委員会の成果ふりかえり，ワークショップの成果目標，すすめ方

イ グループワーク

- ・避難生活期と生活再開移行期にどんな課題が生じるか，世帯ロールの立場で考え，ファシリテーターの進行で模造紙に整理
- ・男女共同参画推進センターに対する発災時の市民ニーズ，今後検討すべき役割について議論
- ・模造紙成果を踏まえて議論
- ・発表準備

ウ 全体発表と意見交換

<班ごとの発表>

田口班

- ・子どものこと、家のこと、何でも相談できるよろず相談ができるような場所とか、繋がりを作ってくれる、コーディネート機能があるとよい。
- ・気軽に受けられるような雰囲気の男性向け相談窓口が必要
- ・平常時からのセンターの取組も大事

市古班

- ・平常時から受けているさまざまな相談業務をできるだけ速やかに再開する
- ・いざというときには御用聞きや、センターの相談の案内等、センターの方から出張って行く試みも必要
- ・避難所では、男女別役割分担が強化される。男女別、男ばかり女ばかりということに対して、いい意味での疑問を投げかけるという非常に大事な役割がある。

<意見交換>

事務局1：センターに期待する役割ということでいろいろ出たけれど、災害のときは平常時以上に相談事業が重要になると思いました。何でも聞いてくれる人がいるというのがとてもニーズとしてあるんだなということがわかりました。

委員：現在、男性相談は、女性に比べて非常に少ない状況ですが、ないわけではない。災害時を想定して、どこでどう対応していくのが望ましいのか、検討していかなければいけないかなと思います。よろず相談的な部分も、受け止める場所が必要ですし、相談できる場所として、センターの電話番号を、避難所やさまざまな場所で周知する、カードを置くとか、そういうことが必要だと思います。

委員：よろず相談と思うと、センターはいろんなことを知ってないといけないから大変だなと思いますが、男性がいて、女性がいて、子どもがいて、お年寄りがいてというのが男女共同参画社会なわけで、その機能を果たすためにセンターは幅広くいろんなことを知ってないといけないので大変だなと思うけれども、その分、私たちがここに行ったらどこかに繋げてくれる、頼れるところとして存在できるといいなと思いました。

男女共同参画推進センターだから、やっぱり男性にもアピールしておくといいと思います。女性だから抱える問題もたくさんあるけれど、これからは男性に対してもアピールする部分も作っていく必要があると考えました。

委員長：ありがとうございます。ここに行けば繋げてくれるというのは大事なキーワードですね。

オブザーバー1：今のお話を聞いていて思いましたが、相談援助をするのは行政職員なので、男女だから何ができる何ができないという考え方はもちろん大切だけど、やっぱりワンストップサービスで、いろんな相談が持ち込まれてもそれをどこに繋げていくかという知識があればいいわけですね。介護だったら介護のプロに繋がればいいので、そのきっかけの部分アウトリーチしていくことが大切なわけです。有事には普段そんなに問題でもないことが顕在化してくるというのが実情としてあると思います。待っていたら駄目で、「実はこういう悩みがあるんじゃないか」という想像力を生かして、過去に相談を受けた人を訪問するとか、アウトリーチが必要だと思います。

委員：地域のコンシェルジュ的な存在であればいいと思います。何か相談しに来たらすぐ繋いでくれる。何でも親切に話を聞いてくれる。本当にやさしく何でも聞いてあげる、繋げてあげる、そういう役割は必要なのかなと思います。

また、ストレスの連鎖を考えるとストレス発散場所があるべきなのかなと思います。例えば、昭和20～30年代ぐらいのような雰囲気、コミュニティーを作ってあげるとかいうのも一つの手だと思うし、例えば被災地だったら、街角テレビをやってみんなでわいわい盛り上がるとか、それぞれ職人とか得意なことがあれば講座を開くとかやれば、その人たちのストレスも発散できるし、それに参加することによってストレスを発散できるようなものもいいのかなと思います。あとは、小さい子どもがいる女性が孤立しているような場合は、近所のおばあちゃんたちが声を掛けてあげる。非常時には、その人たちが意見を聞いてあげて、寄り添ってあげる。その意見や声をセンターが吸い上げるというような形が必要と思いました。

首都大スタッフ：DVを受けている女性からすると男性の存在そのものが怖いので、男性がいるだけで相談に来れなくなるのでは元も子もないので、男性の支援をする際は場所を変えるなどの工夫が必要になると思いました。男性はSOSを声に出しにくい事例を聞くので、支援という言葉でなく話し相手みたいな形で、その話の中からのろんな不満が出てくるんじゃないかと思います。言葉の使い方に工夫が必要かなと思いました。

事務局2：グループ内でDVに対する意見がたくさん出ました。DVに関してはTVドラマや小説、芸能ニュースなどを通じて、広く知られてきていると実感しますが、やはりその被害の深刻さや、個人の問題ではなく社会的な問題であるということについてはまだまだ感じます。災害が起きてDV被害が顕在化した場合、被害者の周りに一人でも多くの理解者がいてくれることが大事だということを感じているので、改めてDVへの理解を深めていただく取組を進めていく必要があると感じました。DVに絡んだよろず相談が寄せられた場合、現在の体制ではワンストップサービスを担うことは難しいと思いますし、まだ具体的にイメージできませんが大きな課題だと思っています。

委員長：宿題をいただいた感じですね。

委員：男女共同参画推進センターのセンターはカタカナですけど、前半は8文字の漢文なんですよね。漢文というだけで普段からアプローチするのが難しいセンターだと思います。まして何か起きたときに、男女共同参画に行けばなんとかなるってどれだけの方に思っただけなのかなと思いました。運営委員会だからこういう話題についてみなさんで考えていただけたけど、果たしてどうなんだろうかと思いました。ここを知らなかったら市民活動支援センターに行くかもしれない、漢字は6文字で8文字よりちょっと少ないし、なんとなく行きやすいということもあるので、とりあえず市民活動支援センターに行くかもしれないです。市民活動支援センターから回してもらえるようなセンターにならなければいけない。毎回、防災安全課の方に運営委員会に参加していただいてありがたいです。防災安全課から見ても頼りになるセンターにならなければいけない。普段頼られていないようでは、そういうときに頼られるはずがないと改めて思いました。

オブザーバー2：やはり32か所避難所があって、実際にそれを回れるのかなと、よろず相談というのもあると思いますが、職員が回るのは難しいというのが現実なのかな。できることとすべきこと、求められることというのは様々あるので、とりあえずQ&Aじゃな

いですが、こういった事例があるよという事例集みたいなのが Q&A みたいに出ていけば一番いいのかなと。例えば、こういった質問に対してこう答えました、これはどこの課に相談すればいいんですよ、というのが予めわかる、カスタマーセンターのような、そういうのがあればいいのかな。その都度その都度考えてもなかなか答えが出ないこともありますので、そういった事例集があるといいのかなと思いました。初めてここに参加したんですが、いろんな意見が出て素晴らしいなと思いました。

委員：男女共同参画ということで、男性も DV 被害を受けている場合もあるし、母子家庭だけでなく父子家庭の方もたくさんいらっしゃる中で、男性も女性もお互いの立場を尊重できるようにセンターが役割を果たせたらいいと思いました。地域と関わっていなかったり、皆さんと溶け込むのが難しいような方は特に悩みを相談しにくい可能性があるんじゃないかなと思ったので、男性、女性それぞれの相談事に耳を傾けて、虐待や DV の兆しにも注意して見てあげられるようになればいいと思いました。

委員：お話を伺いながら、やはり出来ること出来ないことは明確にしておいた方がいいと思いました。大規模災害が起きたときに、センターが出来ることはセンターの中でまず考えておく。市の職員からおそらく質問が来ると思うんです。「こういうことがあるんだけど、どこに行ったらいいですか」ということに対して、センターの職員が、大雑把でもいいのでそれはここにいけば分かると思いますよということだけやってくればいいのか。いろんなところで何でもやりますよ、となると、全てが何も機能しないのではないかという気がしました。

委員：センターに期待されてる役割に何があるかという、やっぱり日頃センターが日常的にどういう仕事をして、どれくらい市民の方と触れ合っているのかというのが一番基本になると改めて思いました。

委員：八王子市で委員長が講演されたのを見に行きました。思ったのは、八王子は市の直轄で取り組まれていて、今調布では男女共同参画推進センターで話をしているということに、非常に違いというか、意味があるのかなと思います。防災課でも市民課でもなくて、センターでこの話をするにどんな意味があるのかと、毎回僕はそう思いながらいたんですけど、そこに意味があるのか、あるいは調布市はそこに意味を見出そうとしているのかと思うわけです。どういう意味があるのかなと常々考えるわけですけど、つまり、こういうときに家族的な問題がすごく顕在化してくるとというのが考えられていたのではないかと感じました。それから男性女性、他にも第3の性があるようですけども、そういうことを大切にしている施策を調布市が考えたいんだということ、男女共同参画推進センターがやってるということに意味を見出す、そういう話し合いを我々はすべきではないかと思いました。あとは、男性はこういうときアル中になる人が多いので、男性の相談というのは必要だと思います。ここは女性センターから発生した課ですけども、女性への対応だけでなく男性にもしてほしいという役割としてもここがあると思います。

事務局3：私もセンターがあまり知られてないというのと、平常時は相談を委託しているので、いざとなったときに果たして私で役に立つのかなという不安がありました。ただ、一か月ぐらい経てば少し落ち着いて、相談員も来てくださるだろうし、そこまでの間、先ほどから皆さんがおっしゃってるように、庁内で連携し、どこでどんなことができる

かというのを常日頃から把握し、いざというときに繋がられるように、体制を整えておこなうてはいけないと感じました。幸いなことにここは「すこやか」が近くにあり、市役所も遠いとは行っても歩いていけないことはないだろう。市役所職員を中心に少しでも相談を繋げて、被災しても心安らかに日々を送れるようなセンターになりたいと思います。

委員：いろいろな話を伺い、センターでうまくコーディネートして繋げてくれればいいんだなと思いました。でも自分たちが災害時に何ができるのかということ、やっぱり日々人と人とが繋がっていないと、それがうまく繋がっていかないだろうなと思うので、日頃から夫婦のコミュニケーションの講座を実施するなど、センターはこういうところだよということを日々やっておかないと、何かあったときに何もできないと思います。困っている人に対して、センターの存在を伝えてあげるということもできると思って、日々人とうまく付き合っていきたいと思いました。

首都大スタッフ2：この間、男女共同参画推進センターのホームページを見ました。4つの内容で女性のための相談を開設していますよね。恥ずかしくてここに来られない女性に対してはどのような形式で把握して、支援としてどのような方法を取ればよいか知りたいです。

副委員長：本日でワークショップ3回目ですけれども、ここにお集まりになった皆さんは、それぞれの専門家、それぞれのお仕事の立場から来ていただきましたから、ワークショップをすると、日頃考えていらっしやることや思いが出て、とても素晴らしかったと思います。やはりセンターの役割ということをすぐ考えますけれども、内藤委員がおっしゃったように男女共同参画というのはなかなかイメージが掴めにくいですが、要するに、こういう災害が起きたときに、自分の命を守る、家族を守る、そして地域がどうなっているのか、あるいは病気でどうしたらいいのか、どこに行ったらいいのか、学校はどうなるのか、ということ、男性女性が一緒になって共に考えるということになるんじゃないかと思います。そうしてセンターの役割を考えてみると、センターで纏められたものを、調布市の行政、学校、市役所の各セクションへ私たちの意見を繋げるということにならないと、私たちがここで話し合ったことが実行できないと思います。問題点・課題点について、私たちのやったことがどういう風に盛り込まれるかということ、話し合いだけでなく意見を言っていく、言葉にしていく、改善していくという方向を見出していくというようにしなければ、ここに集まった方たちが、「なんだ、またこんなのか」となってしまいます。センターの皆様方と私たちとここに集まっていらっしやる専門家の方たちと一緒にやっていきたいと思います。今日は貴重な御意見をありがとうございました。今後ともよろしく願いいたします。

委員長：高橋委員からご意見のあった、この推進センターで議論する意味ですが、資料にも書きました。資料3の下のところの星印です。僕も防災に関する様々な研究者のコミュニティーに属していますが、男女共同参画推進センターのニーズ役割という視点からは、確定した定説はまだないですね。たまたまこんなことをやっているよとフェイスブックでつぶやいたら、関西の山地さんというベテランの女性の研究者から、「市古さん、それ日本で始めてじゃない？」と逆にレスポンスがあったぐらいです。定まった考え方が整理されているわけではなく、実はいろいろないい意味でのラッキーが積み重なった中

でこういう機会があつて、いろいろな可能性・意見を出していく。それは調布市役所に対してだけでなく、内閣府とか、東京都とかに対しても意見を出していくべきいいタイミングなのかなというのの一つです。

もう一つは、前回と今回で意見は大体出尽くしたと思いますので、次はどういう対応ができるのかということです。例えば女性が災害発生時にどう対応をしたのかという実際の経験談をお聞きするのも一つの方法と思います。例えば、一昨年前伊豆大島が台風26号の水害で大きく被災しました。土砂流出地域の真ん中にある椿園という旅館の娘さんと女将さんと、水害の前から僕は繋がりがあつたのですが、伊豆大島というところは町会・自治会はないけれども婦人会があるという非常に面白いところなのです。よく「女性の力は強いよ」って女将さん、清水勝子さんがおっしゃっていました。清水さんをお呼びして話を聞く場を設けるなど、センターの役割というより男女共同という視点から、もしくは女性の視点からというイメージが広がるのではないかと思いました。そんな方向で来年度続けていけるといいと思っております。

委員：浅野先生のお話を聞く機会がなくなつてしまつたのが残念に思つています。センターで2度お話を伺い、災害時、女性は本当に大変だと思つました。皆さんご興味があつたら検索して、どんなことを発信されているかということをご自分の方に引き寄せられたらいいと思つています。

日本で最初、調布すごい、という風になるといいと思つました。

(3) 事務連絡

来年度は全4回開催する予定。第1回は5月以降の予定です。本日の議事録確認についてもお送りいたしますので、ご確認をお願いします。引き続きご協力をお願いいたします。本日はありがとうございました。

以上